

コンヒュージョン・イズ・ネクスト

肩のあまったシャツ

もたれかけた指をはなすと

頬にニュースのかたい光があたった

あっおれだ、いま

映った、いちばん手前だ ほらあいつ、ほら

いま煉瓦を投げつける

きみは興奮しながらスープの豆を口に運ぶ

母親がひたしたスープ

煙がくるなか、担架を 肌のちがう二人が持ちあげて

走りきる

こんなちいさなふやけた芯が 四肢を一日燃やすのか

舌で こうやって

怒りの殻を 剥ぎとってくと

一粒のおののく歌もおれにはない

おれは恥ずかしい、いまも

ショーウィンドーを どうしようもなく

たたき潰したい

こんなこと、あっていいのか

ヨウナシ、においはしない

拳に似た、輪郭のほか なにもない

ちがう

ぼくが言う くだけちったガラス

あらゆるものが萎れるんだ
ほんとうに宇宙は

なにもない

一人の女から産まれて

ここにいる それじたいが
暴動だ